

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)

<https://amda.or.jp/>

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

<https://www.amda-minds.org/>

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

<https://www.amdamedicalcenter.com/>AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

2025 年 4 月 25 日 VOL.48 第 313 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2025 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail:member@amda.or.jp

春号

春

救える命があればどこまでも

AMDA Journal インタビュー

人生めぐりあわせ ～モンゴルで出会った仲間たち～

小倉記念病院消化器内科主任部長 白井 保之 医師

今回の AMDA インタビューは、2022 年から毎年モンゴルの内視鏡技術協力事業に参加し、現地の医師たちとともに内視鏡による食道静脈瘤の治療にあたられている白井保之先生です。(聞き手: AMDA 副理事長 難波 妙)

緊張の医療現場、試される瞬間

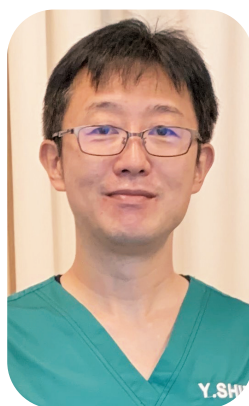
AMDA モンゴルの現場では、毎回冷や汗をかく緊張の瞬間がありました。どんな修羅場でも冷静に治療が続けられる白井先生のお姿から、現地の医師たちは技術を超えた学びを得ているのではないかと感じます。

白井 これまでに聞いたことがないような、日本では起こり得ないことがモンゴルでは起こりますね。治療中に内視鏡モニターの電源が落ちた時は驚きました。特に前回の治療では、胃の静脈瘤に瞬間接着剤を注入する危険な処置の最中、使用していた日本とは異なるデバイスの穿刺針から針だけが外れて、静脈瘤内に残ってしまいました。患者はその前から出血が続いており、今思い出しても背筋が凍るような瞬間でしたが、ぎりぎりのところでトラブルを回避し、なんとか治療を完遂しました。想定外のトラブルシューティングの必要性和責任の重さを痛感した瞬間でした。

それでもモンゴルに向かう理由

AMDA それでもまたモンゴルに行こうと思うのはなぜでしょうか？

白井 やはりそこで頑張る医師たちがいるからです。日本とは異なった環境の中で、真剣に学び、技術を習得しようとする彼らの期待に応えることは、私にとっても刺激的で楽しい時間です。静脈瘤治療はリスクも高く、日本でも敬遠されがちな治療です。そんな治療にモンゴル人医師たちとともにあ



らに自分が必要とされていることを実感します。ただ教えるだけではなく、彼らのひたむきさから、「自分も負けてはいられない」というやる気を逆にもらいます。現地の医師たちは、今では、仲間であり、友達のような存在です。だからこそ、「また会いたい。一緒に治療にあたりたい」と思うのです。

めぐりあわせに導かれて

AMDA 白井先生は、内視鏡が大好きだと公言されていますね。

白井 私は、“何をするか”より、“誰とするか”を大切にして、消化器内科を選びました。AMDA の名誉顧問である吉田智治先生は、日本における静脈瘤治療の第一人者です。その技術とお人柄に惹かれて、私は内視鏡と静脈瘤治療にはまっていきました。AMDA の佐藤理事長を通じて、モンゴルで求められている静脈瘤治療に繋がっていったのは、“めぐりあわせ”だったとしか思えません。

AMDA これまでの経験を踏まえ、今、どのようなことをお考えですか？

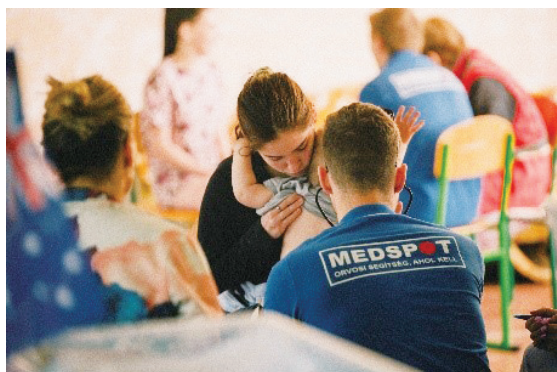
白井 “どのように自分の病院のチームの働き甲斐を創造し、新しい技術を導入して次世代の医師育成を図るか”、これを常に考える日々です。一方で、モンゴルに行ったことで、医療という枠を超え、世界を知る視野を得ました。何かを教えに行くことには責任が伴います。でも、帰りの飛行機の中では、いつも「行ってよかった」と思うのです。AMDA の災害支援の際、すぐに被災地に駆け付ける医師たちのように、何かに貢献したいと考える医療者は日本中に大勢いると思います。私の場合は、内視鏡を通じてめぐりあわせの歯車が合い、この機会に恵まれました。

AMDA 今年もモンゴルが白井先生を待っています。

白井 これまで中々満天の星を見る機会に恵まれなかったのですが、仕事は勿論のこと、今年はモンゴルの自然を現地の仲間と一緒に満喫できたらどんなに素晴らしいだろうと想像しています。私の身体に残る蒙古斑は、もしかしたらこのめぐりあわせをずっと前から知っていたのかもしれない。



ウクライナ人道危機から 3 年



メドスポットの巡回診療



セントミッシェル小児総合リハビリセンターの
クリスマス会



支援物資の医薬品
(ダイナスティメディカルセンター)

2022 年 2 月 24 日、ウクライナで人道危機が勃発し、自身と家族の身の安全のため、多くの人が慣れ親しんだふるさとを離れ、戦闘地域から離れた場所に避難しました。あれから 3 年、海外に避難した人の中にはウクライナに戻ってきた人もいます。しかし、戦線に近いウクライナ南部・東部から比較的安全な西部に避難した人の多くは地元に戻っていません。一方、危険を承知の上で、「地元を離れたくない」「身体的な理由から残らざるを得ない」「地域の人たちを支えたい」など、様々な理由で地元に残る決断をした人もいます。

AMDA はこの 3 年間、現地協力団体と一緒に、ウクライナの隣国ハンガリーに逃れた避難者、ウクライナ西部に避難してきた人、東部に残った人に対し、それぞれの状況に応じた支援を行ってきました。これまで AMDA が支援を行ったウクライナ内外に暮らす避難者は、のべ約 30,000 人に上ります。(2024 年 12 月時点)

現在、AMDA は、避難者に加えて、経済的に困窮している人、および医療機関・団体、避難者を受け入れているコミュニティーへ、医療、食糧、物資を中心に、ウクライナ国内における支援を継続しています。

危機が勃発してから 3 年が経過し、避難生活が長期化する中、継続的な支援の重要性が増しています。2022 年より避難所をまわり、1 ヶ月に 1 度の定期診療を続けている協力団体の医師から、「定期診療を通じて避難者との信頼関係が築けているからこそ、患者は表面的な身体の不調だけでなく、心の不調も訴えてくれる」と伺いました。同様に、戦線から近い東部ハルキウにある現地協力医療機関からは、「危機勃発以前から地元の住民に親しまれている医療機関が、閉鎖することなく、住民の健康を守ること、地域の人々の精神的な支えにもなっている」と報告がありました。

AMDA は一日も早くこの危機が終結し、ウクライナの人々が安心して暮らせる日常が戻ることを願い、現地協力団体とともに支援を継続していきます。

(ウクライナ担当
岩尾 智子)



City of Goodness の小児ホスピス

ウクライナ避難者支援活動を報告 ～在日ウクライナ大使館を訪問～

2022 年 2 月に始まったウクライナの人道危機以来、AMDA は避難者への支援活動を継続しています。これまでの取り組みを報告するため、3 月、在日ウクライナ大使館を訪問しました。

大使館とのご縁は、2024 年 6 月にさかのぼります。岡山県および岡山商工会議所の主催により、在日ウクライナ大使セルギー・コルスンスキー閣下を岡山にお迎えし、ウクライナの惨状について直接お話を伺う貴重な機会を得ました。その際、大使にウクライナ国内の NGO をご紹介いただいたことから関係が始まりました。

今回の大使館訪問では、当時大使に同行されていた二等書記官ユリヤ・ザモルスカ氏と面会し、先般ご紹介いただいた NGO を含む 4 つの関係団体への支援活動の報告や、今後のプロジェクトに関する意見交換を行いました。これからも AMDA は情勢を注視しつつ、ウクライナ国内避難者への支援を継続してまいります。

(AMDA 副理事長 難波 妙)



インド・ブッダガヤ：AMDA ピースクリニック ～現地からのメッセージ～

AMDA は、2014 年よりインド・ビハール州ブッダガヤにある AMDA ピースクリニック（APC）を拠点に、妊産婦健診とマタニティークラス（健康教育・栄養プログラム）を中心とした、母子保健事業を行っています。

今回は活動を支える APC のスタッフと、APC を利用する妊婦さんのご家族からのメッセージをご紹介します。

◆活動を支える APC スタッフ バンティ・メタさん◆

「APC で働き始めて 3 年。きっかけは、コロナ禍で、父が新型コロナウイルス感染症に罹り、1 ヶ月間入院。結果、治療費がかさみ、家の経済状況が悪化していた時、コンピューターの先生から声をかけてもらったことでした。ここで働くようになって、経済的に厳しい暮らしを送る妊婦を支援する APC の活動は、自分の価値観と合致していることがわかりました。社会貢献に携わることが、自分の幸福に繋がっていて、この仕事にやりがいを感じます。正しい知識の伝達であったり、相手に寄り添ったサポートであったり、時には問題への解決策を提供することで、人々が前向きになることに日々喜びを感じています。AMDA の活動のような支援の輪が広がることは、人によりやさしく公平な世界になってほしいと願う私の考えに深く共鳴します。APC の支援により、親となる喜びを実感した患者さんから、日々多くの感謝と祝福をいただいています。活動を応援していただいている皆様、ありがとうございます」



赤ちゃんと健診に来られたお母さん



現地スタッフのバンティさん

◆ APC を利用する妊婦さんのご家族 ソバ・クマリさん◆

「私の義理の娘がこちらでお世話になっています。過去 3 回、妊娠しましたが、いずれも流産となった彼女のことが心配です。私は今年で 68 歳になりました。再び彼女が妊娠したことが判ってから、家事を全面的に担っています。APC でいただく薬の服用も継続してもらっています。一人息子の嫁なのです。この年になると、ただ孫と遊びたいと願うばかりです」

（インド担当 岩尾 智子）



マタニティークラスに集まる妊婦さんたち

フェリシモ『Her smile 基金』を通じた母子保健事業への支援



（株）フェリシモ様には、『Her smile 基金』を通じて、2023 年度より AMDA がインド・ブッダガヤで行っている母子保健事業を支援していただいています。

Her smile 基金は、“女性の幸せや笑顔は、子どもの未来や家族、社会を豊かにすることに繋がっているはず。だから世界中の女性を幸せにし、笑顔があふれる社会にしたい”という願いからスタートしたと伺いました。

先日、フェリシモ基金の事務所を訪れた際、スタッフの方から、“支援を受けている人だけを幸せにするのではなく、この人たちと一緒に幸せになりたい”という思いを共有していただいたことがとても印象的でした。今後もブッダガヤの厳しい環境下で暮らすお母さん

さんたちが元気な子どもを出産できるよう応援し、また同基金に協力してくださっている方々も一緒に幸せになれるような活動をしていきたいと思います。

（インド事業担当 あるちゃん ジョシ）

台湾 IHA がネパールに新たな内視鏡を寄贈



AMDA ネパール支部が運営する AMDA ダマック病院は、ネパール東部ジャーパー郡ダマック市に位置し、地域の中核病院として重要な役割を担っています。第二次医療施設として、2023 年度には 34,184 人の外来患者を受け入れ、6,387 件の分娩を実施しました。

同病院の医師 1 名は、2016 年に岡山県海外技術研修員として岡山済生会総合病院にて内視鏡技術を学びました。

その後、2018 年および 2019 年には、AMDA 理事長の佐藤拓史医師がダマック病院を訪問し、上部消化管内視鏡検査の技術指導を行いました。

さらに、同年 12 月には台湾 IHA 様より大腸カメラをご寄贈いただきました。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2021 年にはオンラインでの研修を実施しましたが、2023 年には再びダマック

病院にて、佐藤医師による下部内視鏡検査の技術指導と病変診断の研修を行いました。

ダマック病院で使用している上部内視鏡は、導入からすでに約 5 年が経過。通常、使用後は機械洗浄を行います。ネパールには適切な洗浄機がないため、看護師が手作業で洗浄を行っています。その影響で、内視鏡自体の劣化が進んでおり、2024 年 8 月に新たな内視鏡をご寄贈いただきました。

その後、ダマック病院長より、「台湾 IHA 様に感謝の意を込めて、今後も内視鏡検査を実施していく」とのメッセージが寄せられました。

同病院でより多くの人が内視鏡検査を受けるようになり、健康に対する意識の高まりを感じます。内視鏡による治療が可能となるよう、今後も現地の医師に日本の高度な技術を指導していきたいと考えています。

(ネパール事業担当 あるちゃん ジョシ)



ハイチ国内避難民医療支援



2024 年 12 月 30 日、AMDA ハイチ支部は、ハイチの首都ポルトープランスにある国内最大規模の避難民キャンプにて、医療支援活動を実施しました。

ハイチは、2021 年 7 月にジョベネル・モイーズ大統領が暗殺されて以来、情勢不安が続いています。また 2010 年の大地震やハリケーン等、過去の自然災害が深く影を落としており、治安は悪化の一途を辿っています。

特にポルトープランスでは、犯罪組織による市民への無差別攻撃、強盗、誘拐、殺人などが発生しており、法の支配が、事実上、崩壊しています。さらに、ギャングが学校を占拠しているため、子どもたちは教育を受ける権利を奪われています。このため、70 万人を超える

市民が、各地に設けられた避難民キャンプに身を寄せている状況です。

支援活動は、周囲の安全を考慮して、内務省の監視の下で行われました。AMDA ハイチ支部の医療チーム（歯科医師 1 名、医師 1 名、看護師 1 名、医療助手 2 名、コーディネーター 1 名）は、大人 165 人、子ども 24 人を対象に、診察と薬の処方を行いました。成人には、頭痛、胃痛、発熱、高血圧、感染症、喘息、糖尿病などの症状が見られ、また児童には、下痢、風邪、栄養失調、発疹、感染症などが多く見られました。このほか、精神疾患の疑いがあるケースも報告されています。

ハイチ国内の治安悪化に伴い、海外からの人道支援団体が次々と撤退する中、継続的な支援が急務となっています。

(AMDA 本部 近持 雄一郎)



AMDA インドネシア支部・スラウェシ島マカッサル洪水被災者支援活動



2024年12月14日、インドネシア・南スラウェシ州の州都マカッサルで発生した大規模洪水を受け、AMDA インドネシア支部は地元の大学等、関係機関と協力し、医学生と医療専門家から成るボランティアチームを派遣。複数の避難所での医療支援や衛生教育、感染症予防活動を行い、被災者の健康チェックや、気道感染症、下痢、皮膚病などの治療にあたりました。加えて、予防接種や衛生管理の啓発も実施。AMDA 本部からの資金援助が今回の救援活動を後押ししました。

AMDA の活動において、災害対応の中核を成すのは、「困った時はお互い様」に代表される相互扶助の精神です。これは、インドネシア支部が全面的に規範としている行動指針でもあります。この精神のもとで行われた今回の活動は、医学生の社会的責任と地域貢献の重要性を再認識する機会となりました。

(AMDA インドネシア支部長 アンディ・フスニ・タンラ)

インドネシア・AMDA マリノ農場からの便り

インドネシアの南スラウェシ州にある AMDA マリノ農場では、近年、農作物の販売拡大に SNS や E コマースを導入し始めました。

岡山県の新庄村で研修を受けた二人のインドネシア人農家が故郷のマリノ村に有機農場を開いて 10 年あまり。有機農法を現地の伝統的な農業に取り入れ、これまでアセロンポと呼ばれる地域原産の米を中心に、様々な作物を栽培してきました。

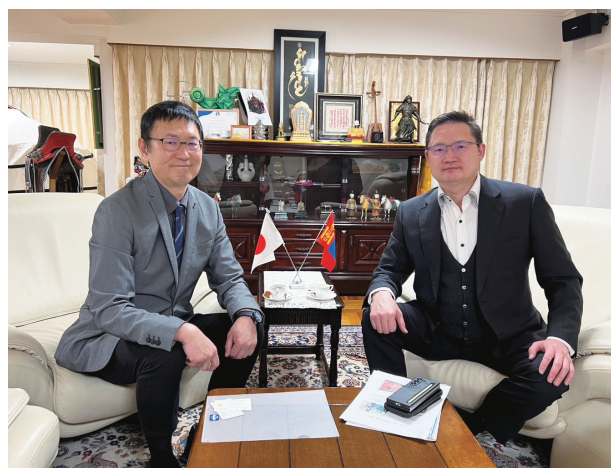
収穫に手間が掛かり、栽培が減少傾向にあったアセロンポでしたが、AMDA マリノ農場はこの品種の再生に貢献。当初は有機農業に対して懐疑的だった地域の生産者でしたが、月日を経るごとに有機農法に転換する農家が増加。2018 年には、消費者からの声を受け、同じ品種でも白米から赤米の栽培に主力商品の生産を切り替えました。コロナ禍で一時需要が低迷したものの、一昨年、有機商品認証と広域的な流通の許可を取得。ネット通販に活路を見出したことで、これまで課題であった販売増進に明るい兆しが見えてきました。

地元の生産者たちは、互いに協力し、手間を惜まず、品質の高い作物を作り続けています。AMDA マリノ農場は、地域のプライドを守り、地元農家の収入向上を助け、環境にやさしい農業を日々実践しています。



(AMDA 本部 近持 雄一郎)

モンゴル内視鏡医療技術協力事業を報告 ～在日モンゴル大使館を訪問～



AMDA は 2017 年よりモンゴル国立医科大学と連携し、内視鏡医療技術協力事業を展開しています。2023 年からはモンゴル保健省の医師免許の下、現地医師とともに食道・胃静脈瘤などの内視鏡治療を実施しています。2025 年 3 月、佐藤拓史理事長とともに駐日モンゴル大使館を表敬訪問し、バイラルサイハン・バンズラグチ特命全権大使に治療の現状と課題を報告しました。公使参事官アルザフグイ・デルゲルマー氏、二等書記官シャンドス・バドー氏も同席し、日本の医薬品や医療機器の安定的な調達方法について協議。今後は関係者の協力を得ながら、モンゴルの患者さんの命を守る持続可能な医療支援体制の構築を目指します。

(AMDA 副理事長 難波 妙)



2月26日、岩手県大船渡市赤崎町地内で林野火災が発生し、死者1名、建物210棟の物的被害が確認されました。これに対し、AMDAは東日本大震災復興支援活動とともにやってきた宮城県・岩手県の地元関係者とともに物資支援を行いました。物資支援は3月12日、16日の2回に分けて行われ、初回の3月12日の物資の受け渡しの際、AMDAから職員を派遣し、物資の受け渡しに同行しました。

市の職員の方によると、避難所にいる方の人数は3月10日の避難解除に伴い少なくなっていますが、ご親戚の家など避難所以外の場所に身を寄せている方も多くいるということです。また住宅が火災を免れた方の中にも、火災臭により自宅での生活が困難な方もおられるという話でした。今回お渡しした物資はそうした様々な事情を抱えた方たちにも提供される予定です。



◆今回の物資支援の内容◆

3月12日 ティッシュ 500箱、歯ブラシ 500本
3月16日 Tシャツ S/M/L を各 500枚

※今回の物資の内容は、事前に大船渡市と協議して決定したものにになります。（プロジェクトオフィサー 小川 直美）

“2011年3月11日、あれから14年” ～東日本大震災～



震災直後の岩手県大槌町（左）と宮城県気仙沼市（右）

AMDAは、2011年の東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県と宮城県を中心に、被災地域を支援してきました。3月11日の地震発生翌日から救援チームを現地へと派遣し、最初の2ヶ月間で合計149人の医療者と調整員が救援活動に従事しました。その後、地域と協力して、復興支援にあたり、被災者の様々なニーズに対応してきました。震災発生から14年、これまで現地での活動をけん

引してきた関係者からのコメントを紹介します。

＊AMDA 大槌健康サポートセンター長・鍼灸師 佐々木 賀奈子

「一人ひとりの14年があり、決してひとりでは今日まで生きてこれなかった。何もかも失いましたが、私は津波でも奪えない人との繋がりや心とは、深く繋がらせていただきました。AMDAとのご縁をいただき、支援する側とされる側を繋ぐ役割をさせていただきました。世の中が目まぐるしく変化する今、心根の通う交流が尊いですし、何よりもありがたいです。自分自身だけが心穏やかにゆったりと生活するのではなく、『困った時はお互い様』の相互扶助の精神にもあるように、助けられたら次は自分が助ける側になる”恩送りの文化”を今後も伝えていきたいと思います。生かされて生き切る！恩送り！」



＊気仙沼市南町紫神社前商店街事務局・AMDA 参与 坂本 正人



「東日本大震災から早いもので14年が過ぎ、私たちの商店街も仮設から現在の本設に移って7年が経ちます。町の区画整理事業も13年かかって昨年終わりました。町はきれいになりましたが、人口の流出は止まらず、地区の住民も思うほど戻ってきていません。駐車場と空き地だけが目に留まります。まだまだ問題は山積みです。また、自分たちの意識の風化も気付かぬうちに進んでいる気がします。昨年、一昨年に震度5の地震が続いて起こり、津波警報が出ているのに高台にある避難所には3～4名しか避難してこず、大勢の方は自分の車を避難所において家に戻るというありさまでした。今一度、東日本大震災を振り返り、考える時期ではないかと感じています」

徳島県阿南市の防災訓練



2 月 9 日、徳島県阿南市で防災訓練が行われ、AMDA は、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームにご協力いただいている医療機関・団体とともに医療救護訓練に参加しました。AMDA と阿南市は、南海トラフ地震等による大規模災害時の医療救護活動等に関して、協力協定を締結しています。

阿南市医師会をはじめ、陸上自衛隊、徳島県看護協会、阿南保健センター、阿南防災士の会、地元消防団の方々が参加され、行政と民間が一体となって訓練を行う様子に、防災に対する意識の高さを感じました。

訓練に参加した方々からも、「地域住民との連携の大切さを感じた」「災害医療に対するイメージがより明確になった」などの声が聞かれました。

また AMDA 兵庫『防災海』が、テントを利用したサウナの展示を会場にて行いました。服を着たままテントに入れるよう温度が調節されていたため、寒空の下で参加された住民の方々からも好評を得ました。

この訓練の様子は、2 月 28 日に倉敷平成病院で開催された医療機関ミーティングでも共有されました。訓練に参加しなかった医療機関からも、阿南市の取り組みについて、「参考になった」とのご意見をいただきました。

「医療救護訓練の流れ」

消防団が負傷者を救護所に搬送 → 受付・検温（感染症疑いの方を判別）→ トリアージ
→ 重症度に応じて治療を受ける → 重症者の救急搬送（車両乗り込みまで）

＜AMDA からの参加団体＞ ホウエツ病院、諏訪中央病院、AMDA 兵庫・「防災海」、AMDA 神女クラブ、DiMOT
(南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部 本部長 大西 彰)

(株) 中野コロタイプ寄付贈呈式

この 17 年間、欠かすことなく AMDA をご支援くださっている (株) 中野コロタイプ様の寄付贈呈式を 2 月 14 日に AMDA 本部にて行いました。

中野コロタイプ様には、年賀状に AMDA のロゴを印刷することで、代金の一部が AMDA の活動資金として寄付される『AMDA 募金付き年賀状』を通じて、AMDA の活動をご支援いただいています。「年賀状の受注もいろいろな事情で厳しくなっていますが、来年も続けます」とのありがたいお言葉をいただきました。



(株) トマト銀行『AMDA 国際医療貢献定期預金』による寄付贈呈

3 月 13 日、(株) トマト銀行様から 4 名がお越しください、AMDA 本部にて寄付金の贈呈式が行われました。常務取締役営業本部長の中様より贈呈のご挨拶を賜った後、先日、岩手県大船渡市で発生した森林火災に対する物資支援活動について AMDA から報告を行いました。その後、国内外の緊急救援活動に関する現在の様子を AMDA の佐藤理事長がお伝えしました。

～トマト銀行常務取締役営業本部長 中様より～



「AMDA の国際医療貢献に敬意を表し、その活動を応援するため、AMDA 国際医療貢献定期預金の取り扱いを 10 年にわたって続けてきました。お客様のご理解とご賛同をいただき、定期預金の新規預入総額の 0.1% (上限 30 万円) を AMDA に寄付しています。今後の支援活動にお役立てください」

それぞれの法人様より、温かいご支援を長年頂戴し、心から御礼申し上げます。 (財務部長 難波 比加理)

◆ AMDA では講師派遣を随時承っております。ご希望の場合はお問い合わせください。

●単発実施講義・講演 2025 年 1 月～3 月

●カリキュラム講義 2024 年度

講演月	団体名 (実施日順)
2025 年 1 月	鎌倉市災害ボランティアセンター連絡会議
2025 年 1 月	旭川荘厚生専門学院
2025 年 1 月	徳島大学医学部
2025 年 2 月	岡山市立石井小学校
2025 年 2 月	赤磐市障害者自立支援協議会
2025 年 2 月	岡山市立富山小学校
2025 年 3 月	岡山北西ロータリークラブ
2025 年 3 月	真庭市民生委員児童委員協議会勝山支部

団体名 (五十音順)	講義内容
相生市看護専門学校	国際看護・災害看護
朝日医療大学校	国際看護Ⅰ・災害看護Ⅰ
岡山医療センター附属岡山看護助産学校	国際看護
岡山県立大学大学院	災害医療援助論・災害医療援助論演習
玉野総合医療専門学校	国際看護・災害看護
ノートルダム清心女子大学	ボランティア実践Ⅰ
福山市医師会看護専門学校	国際協力
美作市スポーツ医療看護専門学校	国際看護・災害看護